

## 0. はじめに

本発表の役割は、特に発表2を受けて、そのシナリオがどの程度蓋然性のあるものなのかを、アクセント史に従事してきた研究者の立場から検討し、今後検討すべき課題を提示することにある。1節では、無アクセント方言の分布から考えられる日本諸語の歴史に関する発表2が提案するシナリオの問題点を再整理した上で、特にアクセント（・イントネーション）の機能面から、今後検討すべき課題を述べる。2節では、無アクセント以外のアクセントの分布について、特に無アクセント同様、その「周圈的分布」の解釈が問題となる外輪式アクセントの分布と2拍名詞4類・5類のアクセントに関する問題を取り上げる。

## 1. 無アクセント方言の分布と機能からみた日本諸語の歴史

### 1.1 無アクセント方言の地理的分布からみた日本諸語の歴史

Uwano (2012: 1429) を参考にすれば、無アクセント (accentless) の方言は北関東から南東北の地域、及び、九州の北西から南東にかけての地域にまよって分布している他、八丈島・静岡県井川・福井・大洲に局所的に分布していることが分かる。列島の比較的周縁部と言える北関東・南東北地及び九州の北西から南東部にかけての地域に分布していることから、それを周圈論的に解釈し、無アクセントの体系を古形とする向きは古くからある考え方である。また、発表2で述べられているとおり、八丈島などの「辺境」に局所的に分布していることも、その解釈を支持するものと捉えることが可能である。一方で、比較言語学の立場からは、無アクセントの体系から有アクセントの体系が生じたという仮説は、日本諸語の先史において声調発生が起こったとする証拠が見出せない以上、棄却せざるを得ない。つまり、日本諸語のアクセント体系の祖体系としては、現在のところ有アクセントの体系を想定することになる。しかしながら、上野 (2018) が示唆するように、「日本諸語のアクセントの祖体系」は「日本祖語の音韻体系におけるアクセント」と必ずしも同義ではない点には注意が必要である。本来であれば、アクセントの祖体系は、その祖体系が想定される段階における音節構造や分節音（や形態音韻論など）とともに再建されるべきものである。ただ、現在までのアクセント史研究においては、少なくとも祖体系全体に関して、そういった観点からの研究はほとんどなく、アクセント体系だけを独立させて再建するという形が一般的である。この点は、今後のアクセント史研究にとっての大きな課題であろう。

発表2で言及がある通り、上野 (2019) によれば、東北諸方言に見られる濁子音の鼻音性は、中央方言の影響によって後から獲得されたものであり、東国系方言の濁子音は本来的には前鼻音を伴わなかったと考えられる。中央方言と東国系方言との共通祖語（≒日本祖語）の段階において、後代の濁子音に対応するものがどのようなものであったかをここでは論じないが、上野の言う通り、両方言の分岐を定義づける音変化として、濁子音前の前鼻音の発生／消失が考えられるのは確かである。それに対して、北東北を中心に観察される外輪式アクセントと京都を中心に分布する中央式アクセントとは、当然のように極めて規則的なアクセント型の対応を示している。注目されるのは、外輪式アクセントの方言が分布する地域と濁子音に鼻音性を伴う方言が分布する地域とが、完全ではないにしてもかなりの程度一致することである。このことから考えられる1つのシナリオは、東国系方言が元来は無アクセントの体系であったと想定した上で、東国系方言に濁子音の鼻音性をもたらした中央方言が、有アクセントの体系

をももたらしたとするものである<sup>1</sup>。

## 1.2 アクセントの機能からみた無アクセントの形成過程と日本諸語の歴史

上記のシナリオの1つのメリットは、特に八丈島や井川の無アクセント方言について、有アクセントを持つ中央方言系の浸食から取り残されたものとして解釈できる点にある。

金田一(1977: 174-175)が指摘しているように、無アクセントの方言の一部は、近隣のアクセント体系からの変化として説明できると考えられる。例えば、福井の無アクセントについては、松倉(2014)が「曖昧な二型アクセント」からの変化を想定している。注目されるのは、先行研究(山口 1984)で明瞭な二型アクセントであった福井市の東部において無(型)アクセントが観察されていることである。松倉によれば、先行研究で調査対象となっている話者は、松倉が調査対象とした話者よりも30歳ほど年長の世代であり、この地域では無型が進行していることがうかがえる。発表者自身の調査経験からすると、佐賀県旧杵島郡及び旧藤津郡あるいは熊本県玉名市といった無アクセント方言に隣接する地域の方言においても、二型アクセントであるとは言えても、個人差が大きかったり、同じ語についても実現が一貫しない「ゆれ」が見られたりすることがある(平子・五十嵐 2016ab)。

それに対して、特に八丈島における無アクセントの方言は、島嶼部に孤立して分布していることから、どのような体系から変化して生じたかは定かではない。井川についても同様で、そうした孤立した地域に分布する無アクセント方言をある種の「基層」によるものとする立場が、発表2などの立場である。しかし一方で、比較言語学の立場からすれば、それは当然内的変化によって生じたと考えられる。問題は、そこにどのような変化を想定する必要があるかということである。ここでは、具体的な音変化としてどのような変化が起こったかは取り上げず、アクセントの機能面からこの点について考えてみたい。

一般にアクセントは弁別的な機能を有するとされる。しかし、多型アクセントである標準語の場合であってもアクセントのみによって区別される最小対は多くなく、その機能負担量は大きくない。一方で、小松(1989: 1653)は、日本語のアクセントの機能は弁別機能の衰退により、弁別機能から統合機能を指向する方向に変化したとしている。このことは、発表者の能登島諸方言(石川県)におけるアクセント変化に関する研究(平子 2015)からも示唆される。

木部(2010)は、日本語諸方言のアクセント体系の多様性について歴史的な説明を試みた研究である。それによれば、中央式アクセントのように語声調(式)とアクセント(核)の両方を持った体系から語声調が消失することによって現代東京式アクセントのようなアクセントのみの体系が成立したという。確かに、各方言アクセントの体系における弁別的な要素が何かに着目した場合、木部が提案するような歴史的変遷に関するシナリオは妥当なものだと言えるだろう。

これに対して発表者は、その過去の研究(平子 2015)において、石川県の能登島諸方言では、句レベルにおける韻律パターン(韻律句形成過程)の変化を背景にして、元々あった式の対立が失われたと思われることを示した。そして、そのことが、金田一(1950[1974])などで想定される「京阪式から東京式へ」のアクセント変化の場においても当てはまるものであることを主張した。すなわち、木部の言う語声調(式)とアクセント(核)の体系から、語声調が失われる背景には、韻律句形成過程の変化、つまり、句レベルでの韻律パターンの変化があったと考えられるのである。これは小松の言う統合機能を指向する方向への変化と言える。通言語的にみても、boundary toneの獲得による声調変化はあり得ることであり(Hyman 1978: 265など)、発表者の主張に一定程度の妥当性は認められるものとする。

その上で、発表者は、木部(2010: 34)がアクセントと語声調の関係について歴史的観点から提案した

<sup>1</sup> この場合、さらに問うべき問題として残るのは、東国系方言におけるその無アクセントの体系は二次的な発生によるものなのか否かということであるが、ここではこの問題に触れない。



さて、そうした立場の中で、外輪式アクセントの成立過程について、ある程度明示的に述べているのが、金田一（1978）と木部（2008）である。金田一（1978）と木部（2008）は基本的に同じ考え方であると思われ、両者は「平安京都のアクセント」から以下のようなプロセスを経て、外輪式アクセントが成立したとする（ローマ数字は拍数、アラビア数字は類の番号を示す。また、[ はピッチの上昇位置、] はピッチの下降位置を示す。oは拍である）。

金田一の想定する外輪式アクセント成立過程

類	平安京都			外輪式
III-1	[ooo-o	=	[ooo-o	> o[oo-o
III-2	[oo]o-[o	>	[ooo-o	> o[oo-o
III-4	ooo-[o	>	[oo]o-o	> o[oo]-o
III-5	oo[o-o	>	[o]oo-o	> o[o]o-o
III-6	o[oo-o	=	o[oo-o	> [o]oo-o
III-7	o[o]o-[o	>	o[oo-o	> [o]oo-o

すなわち、ピッチの下降が消滅し、それによって、2類が1類に、7類が6類に統合するわけである。しかし、金田一と木部が扱う外輪式は、北東北と九州北部のそれであり、三遠や雲伯における類別体系は考慮外にある。

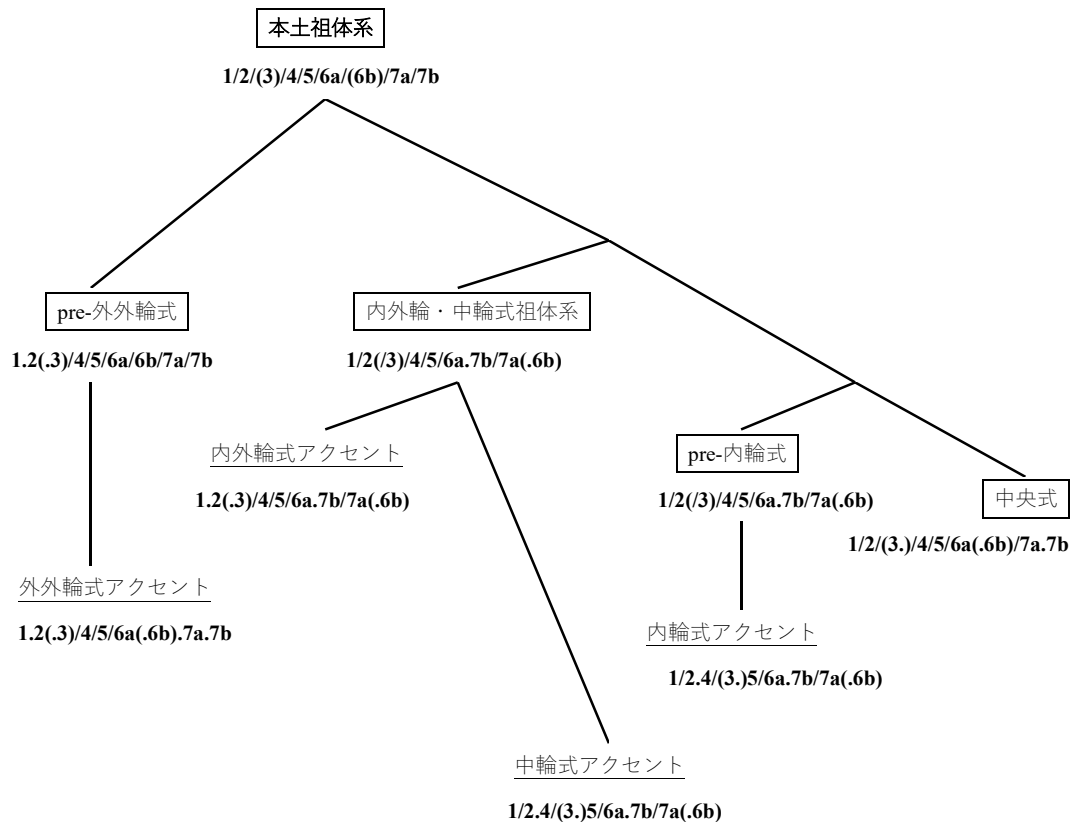
一方、平子（2017）では、上記4地域の外輪式アクセント方言における三拍名詞の6類と7類のアクセントについて、三遠・雲伯では基本的に6類は0型（ピッチの下降がない型）、7類は0型で現れるものと非0型で洗われるものとがほぼ同数であることを示した。それに対して、北東北や九州北東部では6類・7類ともに1拍目の後にピッチの下降がある型（1型）が多い。つまり、北東北および北部九州地域の外輪式アクセント方言では、6・7類が統合していて、しかも非0型となっている一方、三遠・雲伯では6類と7類とが完全には統合していないのである。また、三遠と雲伯とでは7類の「分裂」のあり方がほぼ一致し、しかも、それは上野（2006）などの先行研究で指摘される中輪式・内輪式アクセントのそれとも一致する。注目すべきは、三遠・雲伯の外輪式アクセントの方言がともに中輪式アクセント方言に囲まれているということにある。地理的な観点からも両者が系統的に近いことは明らかであろう。

発表者は、その結論として従来の外輪式を、6類と7類を統合させている北東北・九州北部の外輪式（外外輪式）と、そうではない三遠・雲伯の外輪式（内外輪式）とに分け、その2つの外輪式が中央式との歴史的関係において互いに異なるものだと主張した。そして、各方言の地理的分布などを考慮して、次のページにあるような系統樹を提案した。

さて、4地域の外輪式アクセントの共通性を強調し、その地理的分布を説明するのに、出雲から北東北など各地への民族移動を想定しようとする見方がある（de Boer 2010 など。また発表2も同様の立場である）。しかし、既に述べたように、外輪式アクセントも一様ではなく、例えば内外輪式は、類別体系も地理的位置も中輪式に近く、それは両者の系統的な近さを示唆するものと考えられる。一方で、外輪式アクセントに共通する平安時代京都方言アクセントの高起類（3拍名詞で言えば1~3類）に対応する類が、無核型となって統合しているという事実は、比較言語学的な立場によって解釈すれば、「祖体系における平安時代京都方言アクセントの高起類に対応する類は、互いに異なるアクセント型でありながら、後に全てが無核型へと統合するようなアクセント型であった」ということになる。

もちろん、その場合でも外外輪式が内外輪式の体系から派生したというシナリオは可能であるが、それぞれの外輪式の内部について、より詳細な調査をした上で、本当にそのようなシナリオでしか説明が

できないのか、ということを考えていく必要がある。これは、各地の無アクセント方言についても指摘できることである。



## 2.2 2拍名詞4類と5類のアクセントの地理的分布について

奥村（1981）は、島根県出雲市大社町（旧簸川郡大社町）周辺の方言において、アクセント語類の2拍名詞4類と5類とにアクセント上の区別があることを指摘した。この大社町周辺の方言に認められる、2拍名詞1類と2類とが区別を失いながら、4類と5類とには区別がある類別体系を持つアクセントを、奥村は「大社式アクセント」と呼び、周辺諸方言のアクセントと区別をした。これらの研究より前に、2拍名詞4類と5類のアクセントの区別が認められていたのは、中央方言とそれに地理的に連続する方言に限られていた。中央方言では、平安時代以前から2拍名詞4類と5類のアクセント上の区別があったとされるが、その区別を示す文献資料上の証拠は非常に限られている。このことを根拠に、現代中央方言における両類のアクセント上の区別を、祖語にあった区別の保持ではなく、中央方言における二次的な改新とする早田（1977など）のような研究もあった。

発表者は、自らの臨地調査の結果と先行研究にあるデータとに基づいて、出雲地域における4類と5類のアクセントについて、東部ほど頭高型が多く、西部ほど尾高型が多いという地域差を明らかにした（平子 2021）。そして、この方言においては頭高型から尾高型への右方シフトが起こったと考えられることを示し、大社式アクセントにおける4類と5類のアクセントの対立はその変化が途上にあることなどによる見かけ上のものに過ぎない蓋然性が大きいことを主張した（廣戸 1986も参照）。

この発表者の主張が仮に妥当なものであっても、それは祖語の段階に2拍名詞4類・5類のアクセント上の対立を再建することを否定するものではなく、消極的なものでしかない。しかし、1つの方言だけを見た場合には共時的に対立を成すように見えるものであっても、言語地理学的な観点から周辺方言

との関係を考察することによって、それが祖語に遡る対立でない可能性を指摘できることを示したのが上記の研究である。各地の無アクセントについても（より）ローカルなレベルでの言語地理学的な研究が必要であろう。

## 参考文献

- de Boer, Elisabeth M. (2010) *The historical development of Japanese tone*. Otto Harrassowitz.
- 早田輝洋 (1977) 「生成アクセント論」『岩波講座日本語 5 音韻』323-360. 岩波書店.
- 平子達也 (2015) 「能登島諸方言におけるアクセントの変化—「語頭隆起」とその後—」『日本語の研究』11(1) 18-35.
- 平子達也 (2017) 「外輪式アクセントの歴史的な位置づけについて」『アジア・アフリカ言語文化研究』94: 259-276.
- 平子達也 (2021) 出雲方言アクセントの分布と歴史—2 拍名詞 4 類と 5 類のアクセントをめぐって『筑紫語学論叢Ⅲ—日本語の構造と変化』100-135. 風間書房.
- 平子達也・五十嵐 陽介 (2016a) 「佐賀県中南部諸方言の二型アクセントについて」『実践女子大学文学部紀要』58: 1-22.
- 平子達也・五十嵐 陽介 (2016b) 「熊本県玉名市方言のアクセントについての初期報告」『実践國文學』89: 107-69.
- 廣戸惇 (1986) 「出雲アクセント名詞二音節語の四類・五類の尾高型の成立と中舌母音の発生」『方言語彙の研究』471-518. 風間書房.
- Hyman, Larry (1978) “Historical tonology.” *Tone, a linguistic survey*, 257-269. New York: Academic Press.
- 五十嵐陽介 (2021) 「日本語諸方言のイントネーションと言語類型論」窪菌晴夫・野田尚史・プラシャント パルデシ・松本曜 (編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』22-48. 開拓社.
- 木部暢子 (2008) 「内的変化による方言の誕生」『シリーズ方言学 1 方言の形成』43-81. 岩波書店.
- 木部暢子 (2010) 「方言アクセントの誕生」『国語研レビュー』No.2: 23-35.
- 金田一春彦 (1977) 「アクセントの分布と変遷」『岩波講座 日本語 11』129-180. 東京: 岩波書店.
- 金田一春彦 (1978) 「愛知県アクセントの系譜」『国語学論集』1: 1-19. 笠間書院.
- 小松英雄 (1989) 「日本語 II-3) 日本語の歴史 アクセント」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第 2 巻』1651-1653.
- 松倉昂平 (2014) 「福井平野周辺地域におけるアクセントの周圏分布」『日本言語学会 第 149 回大会予稿集』432-437.
- 奥村三雄 (1981) 「国語アクセント史の一問題—出雲方言のアクセントを中心に」『方言学論 II 方言研究の射程』【井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎 (編) (1997) 『日本列島方言叢書 19 中国方言考 2 鳥取県・島根県』(ゆまに書房) 120-131. に再録】.
- 佐藤栄作 (2007) 「第一次アクセントの成立と語音」『論集』(アクセント史研究会) 3:1-12.
- 上野善道 (1989) 「日本語のアクセント」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻 (上)』, 明治書院: 178-205.
- 上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.
- Uwano, Zendo (2012) “Three types of accent kernels in Japanese.”, *Lingua*, 122: 1415-1440.
- 上野善道 (2018) 「服部四郎と日本祖語」日本言語学会夏期講座特別講演 (2018 年 8 月 24 日, 於東京外国語大学) .
- 上野善道 (2019) 「特殊拍の諸問題」『音韻研究』22: 129-140.
- 山口幸洋 (1984) 「福井市郊外の二型アクセント」『方言研究年報』27: 207-229, 和泉書院.